

緑屋紙工株式会社

製袋技術の高さで
様々な封筒・パッケージを製造企画力
自信有
メイド
イン
ジャパン
試作可
小ロット
量産
対応

高い技術力を持つスタッフ

主な事業内容

封筒やパッケージをはじめとした
紙製品の製造や印刷

主な取引先(納入先)

印刷会社、広告代理店、販促・企画
関連企業、食品メーカーなど

主な製品

封筒、封筒を応用したパッケージ、
アパレルや食品の袋など業務内容
下請け脱却を機にオリジナル
製品の開発などにも注力

一般的な封筒から、特殊紙やオーダーメイド仕様の封筒・パッケージ類の製造・販売を手がける。長年メーカーの下請けとして封筒加工業を営んできたが、平成19年に企業と直接取引ができるようインターネットショップ事業を開始。現在は紙の仕入れや印刷・加工の手配、納品まで一貫した製造体制を敷く。

顧客の要望を聞き取りながら蓄積してきたノウハウを製品開発などに生かしている。封筒以外に、アパレルや食品などの外装パッケージも製造。独自技術で複雑な形状の封筒窓の加工や窓フィルムへの印刷も可能にし、オリジナル製品の開発や、デザイナーとタッグを組んだ封筒の企画・販売も行っている。

強み
オリジナル製品の開発と
生産性向上に取り組む

機械による量産が可能な極小サイズの「プチ袋」や、名刺サイズの封筒を実際に名刺にした「名刺de封筒」といった技術力ある製品が同社の代名詞だ。過去にはテレビなどでも取り上げられている。また、紙製パッケージでプラスチック包装の代替品を製作できるノウハウや

技術を持ち、環境問題にもアンテナを張っている。

生産性向上の取組みとしては、大きな原紙などから一枚の封筒サイズを切り取る断裁機をIoT（モノのインターネット）化した。複雑な断裁工程の計算がパソコンで瞬時にできるようになり、作業時間短縮などに貢献。他にも製造機器にセンサを取り付けて生産状況をモニタリング・自動記録できるようにした。

品質管理
検品作業での効率化を
進め品質向上も狙う

検品作業における自動化も進めている。人手不足の問題が顕在化する中、荻野浩明社長は「今からロボットなどできる部分は自動化する体制を構築しないと生き残っていけない」と危機感を示す。現在、印刷の一部分をチェックするため機械に小さなカメラを取り付けるなど検品の効率化を図っている。

今後は画像処理を活用した検品作業の効率化も視野に入れており、ラインカメラの活用が可能か検討している。同社の機械で一番作業スピードが早い機械に対応できるか調査を進め、将来的にはAI（人工知能）による不良品の除去や印刷の汚れのチェックなどでもできるような研究を重ねる。

社長あいさつ

代表取締役
荻野 浩明さん

昭和32年に洋封筒の手貼り加工を始めて以来、封筒一筋でやってきました。平成19年にネットショップ事業を立ち上げたのを機に、さまざまな挑戦を試みてまいりました。「おそらく日本一なんでもできる封筒屋」のキャッチコピーのもと、オリジナル封筒の製作を得意としています。

主な保有設備

- 断裁機
約500枚/回 勝田製作所製 2台
- エキセン機 4台
- 製袋機
約250枚/分 10台
- 封筒窓貼り機
約180枚/分 5台 他

大阪
01

ISO 9001

住 所／〒547-0021
大阪市平野区
喜連東5-16-15
TEL／06-6709-8110
FAX／06-6708-9136
創 業／昭和32年5月
設 立／昭和37年9月
資本金／1,000万円
従業員／49名



IoT化した断裁機



5円玉が入るサイズの「プチ袋」


<https://www.futo-kobo.com/>